

# 日本神経科学学会 2023 年度の活動報告

日本神経科学学会（渡部文子・東京慈恵会医科大学・awatabe@jikei.ac.jp）

## Activity Report in 2023, The Japan Neuroscience Society

*The Japan Neuroscience Society*

(Ayako M. Watabe, Jikei University School of Medicine, awatabe@jikei.ac.jp)

日本神経科学学会は、脳神経系研究の推進を目的に1991年に設立された団体であり、現在約6000名の会員で構成されています。2017年より旧男女共同参画委員会を発展的に解消し、ダイバーシティ対応委員会が発足しました。今年度の大会は2023年度8月に仙台において4年ぶりの現地開催という形式で開催されました。今後の課題を含め同委員会の活動について報告致します。

### 1. 現地開催学会と今後の課題

本学会における過去10年間の大会参加者数を調べたところ、女性比率は2014年度の24%から毎年着実に増加し、2020年度のweb開催では28%、2021、2022年度のハイブリッド開催では30%を超え、今年度は現地開催のみの開催でしたが、女性比率は過去最高の30.8%となったのが大きな特徴です。参加人数自体は昨年度のハイブリッド大会が最大で3500人越えだったのに対し、現地開催の今年度は2500人となりました。また年代別に見てみると、10代は女性比率が50%、20代も40%であり、20代の女性参加者はこの10年間で倍増しています。詳細な分析は専門委員会の報告を待ちますが、参加が増えている若手女性研究者が年次大会に参加しやすい環境を整備することは、女性研究者が継続して研究活動に従事するために必須であると考えられます。また、30代、40代の参加者女性比率は30%、27%と10年前に比べてわずかに増えているものの、中間管理職にあたるこの世代は、家庭でも子供の受験や親の介護など、出張を伴う活動が困難なワークライフバランス状況を反映するのかもしれません。未就学児

を抱える世代への支援に加えて、今後はこうした世代への対策も必要であると考えます。

### 2. 子育て中の研究者の活動支援

本学会では2004年以来、継続して大会中の託児室を設営しており、子供と一緒に利用できる休憩室も設置しています。今年度は、託児所利用者は延べ51名、1日平均12.8人の利用があり、昨年度から大きく利用者が増加しました。今後はポスター会場等における親子スペース設置等を含め、次年度以降も積極的な取り組みを継続する予定です。

### 3. 大会中のダイバーシティ対応委員会企画

今年度は、ランチョンセミナー「持続可能な神経科学のためのIDBE（アイドビー）」がUC Irvineの五十嵐啓先生、RIKEN BDR/NYU Abu Dhabiの王丹先生企画のもと開催されました。本年度はダイバーシティに取り組む姿勢をより明確に、Stanford大学の井上さやか先生、RIKEN BDRの播磨有希子先生、筑波大学のQi Zhang先生より話題提供があり、今後の課題を議論しました。フロアからは大学院生から活発な質問もあり、特に若手研究者からの熱意が感じられる会となりました。

ダイバーシティ対応委員会としての活動も7年目に入り、さらに今後は日本神経科学会の法人化という大きな節目もあるため、学会としてのダイバーシティ対応の活性化とその可視化を今後さらに高めて行きたいと考えております。